

淡路島における江戸時代中期から昭和時代までの樹林地の変化

一ノ瀬友博

淡路島には、江戸時代後期の分間図と呼ばれる古地図が残されている。分間図は、岡崎三蔵ら徳島藩測量方によって1802年から1831年にかけてオランダから導入されて平板測量の一種を用いて作成された地図で、約45000分の1(国図)、約18000分の1(郡図)、1800分の1(村図)の3つの縮尺で当時の徳島藩全域が整備された。ここでは、淡路島全島が2枚の地図で網羅される郡図を用いて、現在の地形図に幾何補正するとともに、樹林地の抽出を行った。当時の樹林地面積は、第3回自然環境保全基礎調査の現存植生図を用いて比較した結果、総面積はほぼ同じで、江戸時代後期の方が0.5%樹林地が多いことが明らかになった。当時に比べると、土砂採取やゴルフ場などの大規模開発によって、樹林地が失われているものの、標高の高い耕作地が放棄され、樹林化したことが明らかになった。